

おじいさんのランプ

新美南吉

青空文庫

かくれんぼで、倉の隅にもぐりこんだ東一君がランプを持って出て来た。

それは珍らしい形のランプであった。八十糎ぐらいの太い竹の筒が台になっていて、その上にちよつぴり火のともる部分がくつついていて、そしてほやは、細いガラスの筒であった。はじめて見るものにはランプとは思えないほどだった。

そこでみんなは、昔の鉄砲とまちがえてしまった。

「何だア、鉄砲かア」と鬼の宗八君はいつた。

東一君のおじいさんも、しばらくそれが何だかわからなかった。眼鏡越しにじつと見ていてから、はじめてわかつたのである。

ランプであることがわかれると、東一君のおじいさんはこういって子供たちを叱りはじめた。

「こらこら、お前たちは何を持出すか。まことに子供というものは、黙って遊ばせておけば何を持出すやらわけのわからん、油断もすきもない、ぬすつと猫のようなものだ。こらこら、それはここへ持つて来て、お前たちは外へ行つて遊んで来い。外に行けば、電信柱でも何でも遊ぶものはいくらでもあるに」

こうして叱られると子供ははじめて、自分がよくない行いをしたことがわかるのである。そこで、ランプを持出した東一君はもちろんのこと、何も持出さなかった近所の子供たちも、自分たちみんなで悪いことをしたような顔をして、すすごと外の道へ出ていった。

外には、春の昼の風が、ときおり道のほこりを吹立ててすぎ、のろのろと牛車を通つたあとを、白い蝶ちようがいそがしそうに通つてゆくこともあつた。なるほど電信柱があつちこつちに立っている。しかし子供たちは電信柱なんかで遊びはしなかつた。大人おとなが、こうして遊べといつたことを、いわれたままに遊ぶというのは何となくばかげているように子供には思えるのである。

そこで子供たちは、ポケットの中のラムネ玉をカチカチいわせながら、広場の方へとんでいった。そしてまもなく自分たちの遊びで、さっきのランプのことは忘れてしまった。

日ぐれに東一君は家へ帰つて来た。奥の居い間のすみに、あのランプがおいてあつた。しかし、ランプのことを何かいうと、またおじいさんにかみかみいわれるかも知れないので、黙つていた。

夕御飯のあとの退屈な時間が来た。東一君はたんすにもたれて、ひき出しのかんをカタンカタンといわせていたり、店に出てひげを生はやした農学校の先生が『大根栽培の理論だいこん

と實際』というような、むつかしい名前の本を番頭に注文するところを、じつと見ていた
りした。

そういうことにも飽くと、また奥の居間にもどつて来て、おじいさんがいないのを見
まして、ランプのそばへにじりより、そのほやをはずしてみたり、五銭白銅貨はくどうかほどの
じをまわして、ランプの芯しんを出したりひっこめたりしていた。

すこしいつしようけんめいになつていじくつていると、またおじいさんにみつかつてし
まった。けれどこんどはおじいさんは叱らなかつた。ねえやにお茶をいいつけておいて、
すつぽんと煙管筒きせるづつをぬきながら、こういつた。

「東坊、このランプはな、おじいさんにはとてもなつかしいものだ。長いあいだ忘れてお
つたが、きよう東坊が倉の隅から持出して来たので、また昔のことを思い出したよ。こう
おじいさんみたいに年をとると、ランプでも何でも昔のものに出合うのがとても嬉しいも
んだ」

東一君はぽかんとしておじいさんの顔を見ていた。おじいさんはがみがみと叱りつけた
から、怒おこっていたのかと思つたら、昔のランプに逢あうことができ喜んでいたのである。

「ひとつ昔の話をしてやるから、ここへ来て坐すわれ」

とおじいさんがいった。

東一君は話が好きだから、いわれるままにおじいさんの前へいつて坐ったが、何だかお説教をされるときのように、いごこちがよくないので、いつもうちで話をきくときにとる姿勢をとつて聞くことにした。つまり、寝そべて両足をうしろへ立てて、ときどき足の裏をうちあわせる芸げいとう当とうをしたのである。

おじいさんの話というのは次のようであつた。

今から五十年ぐらいまえ、ちやうど日露戦争のじぶんのことである。岩滑やなべしん新田の村に
巳之助みのすけという十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親しんせき戚せきのものとして一人もない、まったくのみなしごであつた。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守こもりをしたり、米を搗ついてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることなら何でもして、村に置いてもらつていた。

けれども巳之助は、こうして村の人々の御世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであつた。子守をしたり、米を搗ついたりして一生を送るとするなら、男とうまれた甲か

妻がないと、つねづね思っていた。

男子は身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。巳之助は毎日、ご飯を喰べてゆくのがやつとのことであつた。本一冊買うお金もなかつたし、またたといお金があつて本を買つたとしても、読むひまがなかつた。

身を立てるのによいきつかけがないものかと、巳之助はこころひそかに待つていた。すると或る夏の日のひるさがり、巳之助は人力車の先綱を頼まれた。

その頃岩滑新田には、いつも二、三人の人力曳がいた。潮湯治（海水浴のこと）に名古屋から来る客は、たいてい汽車で半田まで来て、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子まで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあたつていたからである。

人力車は人が曳くのだからあまり速くは走らない。それに、岩滑新田と大野の間には峠が一つあるから、よけい時間がかかる。おまけにその頃の人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪だつたのである。そこで、急ぎの客は、賃銀を倍出して、二人の人力曳にひいてもらうのであつた。巳之助に先綱曳を頼んだのも、急ぎの避暑客であつた。

巳之助は人力車のながえにつながれた綱を肩にかついで、夏の入陽のじりじり照りつけ

る道を、えいやえいやと走った。馴れないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しきなど気にしなかった。好奇心でいっばいだった。なぜなら巳之助は、物ごころがついてから、村を一步も出たことがなく、峠の向こうにどんな町があり、どんな人々が住んでいるか知らなかったからである。

日が暮れて青い夕闇ゆうやみの中を人々がほの白くあちこちする頃、人力車は大野の町にはいなかった。

巳之助はその町でいろいろな物をはじめて見た。軒のきをならべて続いている大きい商店が、第一、巳之助には珍らしかった。巳之助の村にはあきないやとては一軒しかなかった。駄だ菓子がし、草鞋わらじ、糸繰りの道具いとく、膏藥こうやく、貝殻かいがらにはいった目薬、そのほか村で使いたいいていの物を売っている小さな店が一軒きりしかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つともしている花のように明かるいガラスのランプであった。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かった。まつくらな家の中を、人々は盲のように手でさぐりながら、水甕みずがめや、石臼いしうすや大黒柱いしくばしらをさぐりあてるのであった。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りよめいのとき持つて来た行燈あんどんを使うのであった。行燈は紙を四方に張りめぐらした中に、油のはい

つた皿せらみがあつて、その皿のふちにのぞいている燈心とうしんに、桜の蒼つぼみぐらいの小さいほのおがともると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、附近は少し明かるくなつたのである。しかしどんな行燈にしろ、巳之助が大野の町で見たランプの明かるさにはとても及ばなかつた。

それにランプは、その頃としてはまだ珍らしいガラスでできていた。煤すすけたり、破れたりしやすい紙でできている行燈より、これだけでも巳之助にはいいもののように思われた。このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城かなにかのように明かるく感じられた。もう巳之助は自分の村へ帰りたくないとさえ思った。人間は誰でも明かるいところから暗いとところに帰るのを好まないのである。

巳之助は駄賃だちんの十五銭を貰もらうと、人力車とも別れてしまつて、お酒にでも酔つたように、波の音のたえまないこの海辺の町を、珍らしい商店をのぞき、美しく明かるいランプに見とれて、さまよつていた。

呉服屋では、番頭つばきさんが、椿の花を大きく染め出した反物たんものを、ランプの光の下にひろげて客に見せていた。穀屋こくやでは、小僧さんがランプの下で小豆あずきのわるいのを一粒ずつ拾い出していた。また或る家では女の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻を散らしておは

じきをしていた。また或る店ではこまかい珠たまに糸を通して数珠じゆずをつくっていた。ランプの青やかな光のもとでは、人々のこうした生活も、物語か幻げん燈とうの世界でのように美しくなつかしく見えた。

巳之助は今までなんども、「文明開化で世の中がひらけた」ということをきいていたが、今はじめて文明開化ということがわかったような気がした。

歩いているうちに、巳之助は、様々なランプをたくさん吊つるしてある店のまえに来た。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店のまえで十五錢を握りしめながらためらっていたが、やがて決心してつかつかとはいっていった。

「ああいうものを売つとくれや」

と巳之助はランプをゆびさしていった。まだランプという言葉を知らなかったのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きい吊つりランプをはずして来たが、それは十五錢では買えなかった。

「負けとくれや」

と巳之助はいった。

「そうは負からん」

と店の人は答えた。

「卸値おろしねで売つとくれや」

巳之助は村の雑貨屋へ、作った草鞋わらじを買ってもらいによく行ったので、物には卸値と小売値うりねがあつて、卸値は安いということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助の作った瓢箪ひょうたん型の草鞋を卸値の一錢五厘りんで買いつつて、人力じんりき曳ひきたちに小売値の二錢五厘で売っていたのである。

ランプ屋の主人は、見も知らぬどこかの小僧がそんなことをいったので、びっくりしてまじまじと巳之助の顔を見た。そしていった。

「卸値で売れて、そりや相手がランプを売る家なら卸値で売つてあげてもいいが、一人のお客に卸値で売るわけにはいかんな」

「ランプ屋なら卸値で売つてくれるだのイ？」

「ああ」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。卸値で売つてくれ」

店の人はランプを持ったまま笑い出した。

「おめえがランプ屋？ はッはッはッはッ」

「ほんとうだよ、おツつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だから頼むに、今日は一つだけんど卸値で売ってくれや。こんど来るときや、たくさん、いっぺんに買うで」

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助の真剣なようすに動かされて、いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ、

「よし、そんなら卸値でこいつを売ってやろう。ほんとに卸値でもこのランプは十五銭じや売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。負けてやろう。そのかわりしつかりしよ。うばいをやれよ。うちのランプをどんどん持ってって売ってくれ」

といつて、ランプを巳之助に渡した。

巳之助はランプのあつかい方を一通り教えてもらい、ついにて提ちようちん燈だんがわりにそのランプをともして、村へむかった。

藪やぶや松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもう恐こわくはなかつた。花のように明かるといランプをさげていたからである。

巳之助の胸の中にも、もう一つのランプがともっていた。文明開化に遅れた自分の暗い

村に、このすばらしい文明の利器を売りこんで、村人たちの生活を明かるくしてやろうという希望のランプが――

巳之助の新しいしよばいは、はじめのうちまるではやらなかった。百姓たちは何でも新しいものを信用しないからである。

そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒きりのあきないやへそのランプを持っていつて、ただで貸してあげるからしばらくこれを使って下さいと頼んだ。

雑貨屋の婆ばあさんは、しぶしぶ承知して、店の天井に釘くぎを打ってランプを吊し、その晩からともした。

五日ほどたつて、巳之助が草鞋を買ってもらいに行くと、雑貨屋の婆ばあさんはここにしながら、こりやたいへん便利で明かるうて、夜でもお客がよう来てくれるし、釣つり銭せんをまぢがえることもないので、気に入ったから買いますよう、といった。その上、ランプのよいことがはじめてわかった村人から、もう三つも注文のあったことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。

そこで雑貨屋の婆ばあさんからランプの代と草鞋の代を受けとると、すぐその足で、走るよ

うにして大野へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、足りないところは貸してもらい、三つのランプを買って来て、注文した人に売った。

これから巳之助のしょうばいははやって来た。

はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいつていたが、少し金がたまると、注文はなくてもたくさん買いこんで来た。

そして今はもう、よその家の走り使いや子守をすることはやめて、ただランプを売るしようにばいだけにうちこんだ。物干台ものほしだいのようなわくのついた車をしたてて、それにランプやほやなどをいっぱい吊し、ガラスの触れあう涼しい音をさせながら、巳之助は自分の村や附近の村々へ売りにいった。

巳之助はお金も儲もうかったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった。今まで暗かった家に、だんだん巳之助の売ったランプがともってゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化の明かるい火を一つ一つともしてゆくような気がした。

巳之助はもう青年になっていた。それまでは自分の家とはなく、区長さんのところの軒なやのかたむいた納屋なやに住ませてもらっていたのだが、小金がたまったので、自分の家もつくった。すると世話してくれる人があったのでお嫁よめさんももらった。

或るとき、よその村でランプの宣伝をしておつて、「ランプの下なら畳の上に新聞をおいて読むことが出来るのイ」と区長さんに以前きいていたことをいうと、お客さんの一人が「ほんとかん？」とききかえしたので、嘘のきらいな巳之助は、自分でためして見る気になり、区長さんのところから古新聞をもらつて来て、ランプの下にひろげた。

やはり区長さんのいわれたことはほんとうであつた。新聞のこまかい字がランプの光で一つ一つはつきり見えた。「わしは嘘をいつてしようばいをしたことにはならない」と巳之助はひとりごとをいつた。しかし巳之助は、字がランプの光ではつきり見えても何にもならなかつた。字を読むことができなかったからである。

「ランプで物はよく見えるようになったが、字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ」

そういつて巳之助は、それから毎晩区長さんのところへ字を教えてもらいにいつた。

熱心だつたので一年もすると、巳之助は尋常科を卒業した村人の誰にも負けないくらい読めるようになった。

そして巳之助は書物を読むことをおぼえた。

巳之助はもう、男ざかりの大人おとなであつた。家には子供が二人あつた。「自分もこれでもうやらひとり立ちができたわけだ。まだ身を立てるところまではいっていないけれども」と、ときどき思つて見て、そのつど心に満足を覚えるのであつた。

さて或る日、巳之助がランプの芯しんを仕入れに大野の町へやつて来ると、五、六人の人夫にんぶが道のはたに穴を堀り、太い長い柱を立てているのを見た。その柱の上の方には腕うでのような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物のだるまさんのようなものがいくつかつていた。こんな奇妙なものを道のわきに立てて何にするのだろう、と思ひながら少し先ゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀すずめが腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十米メートルぐらい間においては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんを乾ほしている人にきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんが今度ひけるだけな。それでもう、ランプはいらんようになるだけな」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかつた。電気のことなどまるで知らなかつたからだ。ランプの代りになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがひあるま

い。あかりなら、家の中にもせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおつ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ひとつきほどたつて、巳之助がまた大野へ行くと、この間立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱のようなものが数本わたされてあった。黒い綱は、柱の腕木にのつているだるまさんの頭をいまきして次の柱へわたされ、そこでまただるまさんの頭をいまきして次の柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよく見ると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつだるまさんの頭のところで別れて、家の軒端のきばにつながれているのであった。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかりがともるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀つばめや燕のええ休み場というもんよ」

と巳之助が一人であざわらいながら、知合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間どまのまん中の飯台の上に吊してあつた大きなランプが、横の壁の辺に取りかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつこうのランプが、丈夫じょうぶそうな綱で天井からぶらさげられてあつた。

「何だやい、変なものを吊したじゃねえか。あのランプはどこか悪くでもなつたかやい」

と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありや、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明かるうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ」

と答えた。

「ヘツ、へんてこれんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店も何だか間がぬけてしまった。客もへるだろうよ」

甘酒屋は、相手がランプ売であることに気がついたので、電燈の便利なことはもういわなかった。

「なア、甘酒屋のとつつあん。見なよ、あの天井のところを。ながねんのランプの煤すすであそこだけ真黒になつとるに。ランプはもうあそこにいついてしまったんだ。今になって電気たらいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ」

こんなふうには巳之助はランプの肩をもつて、電燈のよいことはみとめなかつた。

ところでまもなく晩になって、誰もマッチ一本すらなかつたのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明かるくなつたので、巳之助はびっくりした。あまり明かるいので、巳之

助は思わずうしろをふりむいて見たほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ」

巳之助は歯をくいしばって、ながいあいだ電燈を見つめていた。敵かたきでも睨にらんでいるようなかおつきであった。あまり見つめていて眼のたまが痛くなつたほどだった。

「巳之さん、そういつちや何だが、とてもランプで太刀たちうちにはできないよ。ちよつと外へくびを出して町通りを見てごらんよ」

巳之助はむつつりと入口の障しょうじ子こをあけて、通りをながめた。どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じように明かるい電燈がともっていた。光は家の中にあまつて、道の上にもまごぼれ出ていた。ランプを見なれていた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしながら、これも長い間ながめていた。

ランプの、てごわいかたきが出て来たわい、と思つた。いぜんには文明開化ということをよく言つていた巳之助だったけれど、電燈がランプよりいちだん進んだ文明開化の利器であるということは分らなかつた。りこうな人でも、自分が職を失うかどうかというようなどときには、物事の判断が正しくつかなくなることもあるものだ。

その日から巳之助は、電燈が自分の村にもひかれるようになることを、心ひそかにおそ

れていた。電燈がともるようになれば、村人たちはみんなランプを、あの甘酒屋のしたように壁の隅につるすか、倉の二階にでもしまいこんでしまうだろう。ランプ屋のしようばいはいらなくなるだろう。

だが、ランプでさえ村へはいつて来るにはかなりめんどうだったから、電燈となつては村人たちはこわがつて、なかなか寄せつけることではあるまい、と巳之助は、一方では安心もしていた。

しかし間もなく、「こんどの村会で、村に電燈を引くかどうかを決めるだけな」という噂うわさをきいたときには、巳之助は脳天に一撃をくらつたような気がした。強敵いよいよござんなれ、と思つた。

そこで巳之助は黙つてはいられなかつた。村の人々の間に、電燈反対の意見をまくしたてた。

「電氣というものは、長い線で山の奥からひつぱつて来るもんだでのイ、その線をば夜中に狐や狸きつねたぬきがつたつて来て、この近きんべんの田畠たはたを荒らすことはうけあいだね」

こういうばかばかしいことを巳之助は、自分の馴なれたしうばいを守るためにいうのであつた。それをいうとき何かうしろめたい気がしたけれども。

村会がすんで、いよいよ岩滑新田やなべしんでんの村にも電燈をひくことにきまったらと聞かされたときにも、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。こうたびたび一撃をくらってはたまらない、頭がどうかなくなってしまう、と思った。

その通りであった。頭がどうかなくなってしまった。村会のあとで三日間、巳之助は昼間もふとんをひつかぶって寝ていた。その間に頭の調子が狂ってしまったのだ。

巳之助は誰かを怨うらみたくてたまらなかった。そこで村会で議長役をした区長さんを怨むことにした。そして区長さんを怨まねばならぬわけをいろいろ考えた。へいぜいは頭のない人でも、しょうばいを失うかどうかというようなせとぎわでは、正しい判断をうしなうものである。とんでもない怨いみを抱くようになるものである。

菜の花ばたの、あたたかい月夜であった。どこかの村で春祭したくの支度したくに打つ太鼓がとほとほと聞えて来た。

巳之助は道を通ってゆかなかつた。みぞの中を鼪いたちのように身をかがめて走ったり、藪やぶの中を捨犬のようにかきわけたりしていった。他人に見られたくないとき、人はこうするものだ。

区長さんの家には長い間やつかいになつていたので、よくその様子はわかつていた。火をつけるにいちばん都合のよいのは藁屋根わらやねの牛小屋であることは、もう家を出るときから考えていた。

母屋おもやはもうひっそり寝しずまつていた。牛小屋もしずかだった。しずかだといって、牛は眠っているかめざめているかわかつたもんじやない。牛は起きていても寝ていてもしずかなものだから。もつとも牛が眼めをさましていたつて、火をつけるにはいつこうさしつかえないわけだけれども。

巳之助はマッチのかわりに、マッチがまだなかつたじぶん使われていた火打ひうちの道具を持つて来た。家を出るとき、かまどのあたりでマッチを探さがしたが、どうしたわけかなかなか見つからないので、手にあつたのをさいわい、火打の道具を持つて来たのだった。

巳之助は火打で火を切りはじめた。火花は飛んだが、ほくちがしめっているのか、ちつとも燃えあがらないのであつた。巳之助は火打というものは、あまり便利なものではないと思つた。火が出ないくせにカチカチと大きな音ばかりして、これでは寝ている人が眼をさましてしまうのである。

「ちえッ」と巳之助は舌打ちしていった。「マッチを持つて来りやよかつた。こげな火打

みてえな古くせえもなア、いぎというとき間にあわねえだなア」

そういつてしまつて巳之助は、ふと自分の言葉をききとがめた。

「古くせえもなア、いぎというとき間にあわねえ、……古くせえもなア間にあわねえ……」
ちようど月が出て空が明かるくなるように、巳之助の頭がこの言葉をきっかけにして明かるく晴れて来た。

巳之助は、今になつて、自分のまちがつていたことがはつきりとわかつた。——ランプはもはや古い道具になつたのである。電燈という新しいいっそう便利な道具の世の中になつたのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしょうばい^すが失われるからとて、世の中の進むのにじやましようとしたり、何の怨みもない人を怨んで火をつけようとしたのは、男として何という見苦しいぎまであったとか。世の中が進んで、古いしょうばい^すがいらなくなれば、男らしく、すつぱりそのしょうばい^すは棄^すてて、世の中のためになる新しいしょうばい^すにかわろうじやないか。——

巳之助はすぐ家へとつてかえした。

そしてそれからどうしたか。

寝ているおかみさんを起して、今家にあるすべてのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜更よふけに何をするつもりか巳之助にきいたが、巳之助は自分からしようとして、おかみさんが止めるにきまつているので、黙っていた。

ランプは大きさまざまのがみなで五十ぐらいあった。それにみな石油をついだ。そしていつもあきないに出るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、外に出た。こゝろはマツチを忘れずに持つて。

道が西の峠とうげにさしかかるあたりに、半田池はんたいけという大きな池がある。春のことでいっぱいたたえた水が、月の下で銀盤のようにけぶり光っていた。池の岸にははんの木や柳が、水の中をのぞくようなかっこうで立つていた。

巳之助は人ひと気のないここを選んで来た。

さて巳之助はどうするのだろうか。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池のふちの木の枝に吊した。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいっぱい吊した。一本の木で吊しきれないと、そのとなりの木に吊した。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木に吊した。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、燃え、あたりは昼のように明るくなった。あかりをしたつて寄つて来た魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しようばいのやめ方はこれだ」

と巳之助は一人でいった。しかし立去りかねて、ながいあいだ両手を垂れたままランプの鈴なりになった木を見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんで来たランプ。

「わしの、しようばいのやめ方はこれだ」

それから巳之助は池のこちら側の往還おうかんに来了。まだランプは、向こう側の岸の上にもなともつていた。五十いくつがみなともつていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともつていた。立ちどまつて巳之助は、そこでもながく見つめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つ拾った。そして、いちばん大きくともつているランプに狙ねらいをさだめて、力いっぱい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世じせいはすぎた。世の中は進んだ」

と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころを拾った。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴って消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった」

三番目のランプを割ったとき、巳之助はなぜか涙がうかんで来て、もうランプに狙ねらいを定めることができなかつた。

こうして巳之助は今までのしよっぱいをやめた。それから町に出て、新しいしよっぱいをはじめた。本屋になつたのである。

*

「巳之助さんは今でもまだ本屋をしている。もつとも今じやだいぶ年とつたので、息子むすこが店はやってるがね」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、冷めたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君はまじまじとおじいさんの顔を見た。いつの間にか東一君はおじいさんのまえに坐りなおして、おじいさんのひぎに手をおいたりしていたのである。

「そいじや、残りの四十七のランプはどうした？」

と東一君はきいた。

「知らん。次の日、旅の人が見つけて持ってつたかも知れない」

「そいじや、家にはもう一つもランプなしになっちゃった？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけが残っていた」

とおじいさんは、ひるま東一君が持出したランプを見ていった。

「損しちゃったね。四十七も誰かに持ってかれちゃって」

と東一君がいった。

「うん損しちゃった。今から考えると、何もあんなことをせんでもよかつたどわしも思う。

岩滑新田やなべしんでんに電燈がひけてからでも、まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだから

な。岩滑新田の南にある深谷ふかだになんという小さい村じや、まだ今でもランプを使っている

し、ほかに、ずいぶんおそくまでランプを使っていた村は、あつたのさ。しかし何しろ

わしもあの頃は元気がよかつたんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱとやって

しまつたんだ」

「馬鹿しちやつたね」

と東一君は孫だからえんりよなしにいった。

「うん、馬鹿しちやった。しかしね、東坊——」

とおじいさんは、きせるを膝ひざの上でぎゅツと握りしめていった。

「わしのやり方は少し馬鹿だったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだったと思うよ。わしの言いたいののはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがやっていた昔の方がよかったといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意い気く地じのねえことは決してしないということだ」

東一君は黙って、ながい間おじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。やがて、いった。

「おじいさんはえらかったんだねえ」

そしてなつかしむように、かたわらの古いランプを見た。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年7月16日発行第1刷

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年4月20日公開

2011年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

おじいさんのランプ

新美南吉

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>